

萩原達『金正日 隠された戦争』(2006年)

〈おもな参考文献〉

解説

本原稿執筆の二〇〇六年八月現在、七月のミサイル発射実験に引き続き「北朝鮮の核実験間近か」との報道がある。核不拡散問題・核軍縮を専攻する「研究者」として北朝鮮の核開発問題を追つてきだが、北朝鮮が原子炉建設・核燃料棒再処理、「核兵器保有」宣言、ミサイル発射など、常に要求水準を上げ、しかもそれを国際社会が結果的に黙認してきた経緯からすれば、北朝鮮は早晚核実験を行ったう。

それでもなお国際社会が決然たる対応を探らなければ、既に浸食されてい核不拡散体制は致命的打撃を受け、いずれ核兵器アナーキー（無政府状態）への道を開けるどころか。何ともいえぬ敗北感、无力感。実際、「核兵器保有国として自らを確立し、国際的認知を取り付け」「とい長年の目標達成に向けて北朝鮮は驚くほど一貫して執念深く、外交戦術に長けている。

これに対して国際社会は、北朝鮮の大量破壊兵器問題を問題視する一方で米国の強硬姿勢

—朝ソ北金—

(コ)トツクホルム大学アジア太平洋研究所教授兼所長
池上雅子

Andrew S. Natsios "The Great North Korean Famine", United States Institute of Peace Washington, DC, 2001 (邦訳『北朝鮮飢餓の真実』古森義久監訳
坂田和則訳 扶桑社 2002年)

Sue Lautze "North Korea Food Aid Assessment (May-June 1996)", U.S. Agency for International Development, 1996

Sue Lautze, "The Famine in North Korea : Humanitarian Responses in Communist Nations", Feinstein International Famine Center, School of Nutrition Science and Policy, Tufts University, 1997

James Clay Moltz and Alexandre V. Mansurov, Editors, "The North Korean Nuclear Program : Security, Strategy, and New Perspectives from Russia", Routledge, NY, 2000

『金日成著作集』第44巻 朝鮮労働出版社 1996年 朝鮮語

ペク・ポフム、ソン・サンウォン著 『永生』 文化芸術綜合出版社 1997年
朝鮮語 (邦訳 白峰社 1999年)

年表 小此木政夫編『金正日時代の北朝鮮』所収 日本国際問題研究所 1999

このほか多くの著作、論文を参照し教示を受けました。厚く感謝いたします。
引用文献は本文中にそのつど記しました。

を批判し、北朝鮮体制の深刻な人権問題を認識しながらも大量飢餓に對しては寛容な食糧援助。人道支援、といふ支離滅裂な対応に終始し、それが北朝鮮をますます増長させ展を見ないまま昨年十一月以来中斷し、今や全議再開それ自体が自己目的化する体たらしくて、この国際社会の対応の矛盾は甚だしい。北朝鮮問題を巡って一體なぜこのようなる観である。

中國やロシアが北朝鮮を衛星国として存続させたがるという地政学的要因を差し引いても、この国際社会の対応の矛盾は甚だしい。北朝鮮問題を巡って一體なぜこのようなる観である。

いつのよつ疑惑問題に悩んでいた折、一時帰國の際に立ち寄った書店の新刊書コーナーで本書を偶然手にした。タイトルはいかにもおどろおどろしい。ところがその内容は、巨悪に立ち向かう胰臘の検察官がひとつひとつ明確な証拠を示して理路整然と罪状を論証してゆく。ついに迫真に満ちた説得力と実証性に富む。

またその結論、「九〇年代金正日は二つの戦争を戦った。一つは金日成に対する路線闘争。もう一つは国内敵対階層への殲滅戦」は戦慄すべきものである。結果的には北朝鮮の核開発を阻止できなかつた抜け穴からの一九九四年米朝核組み合意の謎も解けて

（この件は）本書を偶然手にしたもので、一時痛國の際に立ち寄った書店の新刊書コーナーで、本書を偶然手にした。タイトルはいかにもおどろいた感じの「新刊書」である。ところがその内容は、巨悪に向かう癡漢の検察官がひとつひとつ明確な証拠を示して理路整然と罪状を論証していくへと、ついに油眞に満ちた説得力と実証性に富む。

中國やソシアが北朝鮮を衛星として存続させたがるという地政学的因素を差し引いても、この国際社会の対応の矛盾は甚だしい。北朝鮮問題を巡って一體なぜこいつ狂想曲に陥ってしまったのか。金正日ひとりが明確な目標に向けて断固たる戦術を開いてい観である。

を批判し、北朝鮮体制の深刻な人權問題を説いたながらも大量飢餓に対しては寛容な食糧援助・人道支援、といつ支離滅裂な対応に終始し、それが北朝鮮をますます増長させた。米国・北朝鮮・韓国・中国・ロシア。日本からなる六者協議は、何ら実質的進展を見ないまま昨年十一月以来中断し、今や会議再開それ自体が自己目的化する体たる限りである。

北朝鮮元高官達の証言など極めて説得力ある論拠にものかわらず、半信半疑であった。しかし、その後ある国際研究機関で、青瓦台で三人の保守系大統領のアドバイザーや抄証を頼まれるに及んで、萩原氏の分析が單なる仮説ではないと直感した。また萩原氏は、亡命した北朝鮮元最高幹部黄長耀書記の回顧録『金正日への宣戦布告』文春文庫(?)を世界に先駆けて翻訳出版されたが、金体制を知悉する黄博士がかくも信頼を寄せていること、萩原氏の分析が裏付けられるものであらう。

萩原氏は一九九〇年代食糧危機時の三百万人ともいわれる北朝鮮餓死者について、「敵対階層殲滅の急の金正日の意図的政策の結果」と恐るべく分析する。「敵対層への報奨や大量被壊兵器開発費に当てる」という説は、純粹に人道援助を行ってきた人々や援助団体にとっては認め難い見解であろう。

しかし、歴史の真相はしばしば我々の常識や想像を絶する計略に満ちていて。例えば近年エン・チアンジヨン。ハリディの歴史研究『マオ―誰も知らない毛沢東』講談社などで明らかになった毛沢東の実像は、共産革命リーダーとは程遠く、単にスターリンの世界戦略に追随し、軍備増強(ひいては武装)と内權力基盤の強化を組み合わせることを忽然と理解した。したがって、人権問題は棚上げにして枝葉問題のみを話しあう、という六者協議のアプローチは欺瞞である。

今更、萩原氏を客員研究员としてストックホルムの研究所にお招きしたのも、この人権問題の本質的要性について理解を深める為だった。六者協議が参加国ぞれぞれの戦略、利害計算から空転していくのに對し、歐州は核不拡散と人権外交の観点から北朝鮮から外交関係を樹立し、二十一世紀に入つて大半のEJIC諸國の中では例外的に北朝鮮に対する政策を採つてきた。例えばスウェーデンは、西側諸國が北朝鮮と国交樹立する以前は、西側と北朝鮮を結ぶ数少ない外交チャネルであった。また朝鮮半島中立国監視委員会(NNSCC)の一員として半世紀以上も板門店に軍スタッフを駐在させていた。

スウェーデンは、今までトライなどと並んでEJICの北朝鮮政策をリードしており、EJICの人才培养プログラムの一環で多くの北朝鮮政府実務レベルの官僚を各省庁や企業へ研修機関に受け入れている。人道支援に力を入れるEJIC諸国が北朝鮮の体制と人権問題についても、やはり重要なことは重要である。

年、南北朝鮮政府は北朝鮮政府に對し人道援助に際して人權問題を取り上げるが、長時間に亘る三十五万人口とも言われる脱北者の人權迫害状況は深刻である。彼らは北朝鮮。中國の公安警察に追われるか人身売買ビジネスに曝けられ、太陽政策を掲げる韓國盧武鉉政権や大量難民を恐れる日本政府からは厄介者扱いられる、完全に忘れた人々、棄民である。

EPIならば、純粹に人道的見地からこの忘れられた人々に救いの手を差し伸べられるかも知れない。萩原氏は、北朝鮮問題に関する恐るべき実証研究を執筆する傍ら、北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会の設立メンバーとして献身的な活動を行っている。

中国や他の周辺アジア諸国内には、自らの自由と命を賭して脱北難民の北朝鮮。中國からの脱出を助ける日本や韓国の中堅活動家が多い。それは、第一次世界大戦中の特定の体制の転覆を図りながら、他方では皮相的かつ短絡的な戦略からオサマ・ビン・ラディンやサダム・フセイインのようなフランス・シヨタインを生み出す過ちを犯してきた。それは、米国の政策が「人道主義」と「民主主義」という価値を眞に中核に据えてきた。

思惑じも一線を画す。萩原氏の北朝鮮体制批判は、そつた大国の戦略計算。

今更ストックホルムワジン・バジDCに滞在された萩原氏は、七月にソウルで出版された本書の英訳版と共に北朝鮮問題の根幹に関する分析を精力的に欧米の政界関係者・外交官・専門家に紹介された。これは、自著の宣伝じつよりも、他の専門家達からのフィードバックを受ける、自著の真摯な検証作業と見受けられた。

末尾にかかるが、萩原氏はもうひとつ『朝鮮戦争—金日成とマッカーサーの陰謀』(文春文庫)という大変重要な業績を一九九三年に出している。朝鮮戦争時に米軍が押収した百六十万ペースジに及ぶ北朝鮮側資料を読破され、純粹に北朝鮮側の觀点から朝鮮戦争の発端と経過を詳細に解明した稀有の業績である。朝鮮戦争に関する学術研究書は数多く出ているが、萩原氏の研究は全般的に北朝鮮側資料に基づく点で極めてエースクであり、今後国外の学界で広く読まれれば朝鮮戦争史觀を変えるにいたりかねない、関連研究者必読の古典となる。

される。